

市内医史跡めぐりについて

6月10日(日)・14:00~17:00

14:00・佐賀県公文書館集合

公文書館視察・史料閲覧

15:00~佐賀県立図書館調査

相良知安関係資料閲覧

16:00~八幡小路、医学校跡、永松東海・松

隈甫庵住居跡、好生館発祥の地など近距離

の医史跡めぐりをします。

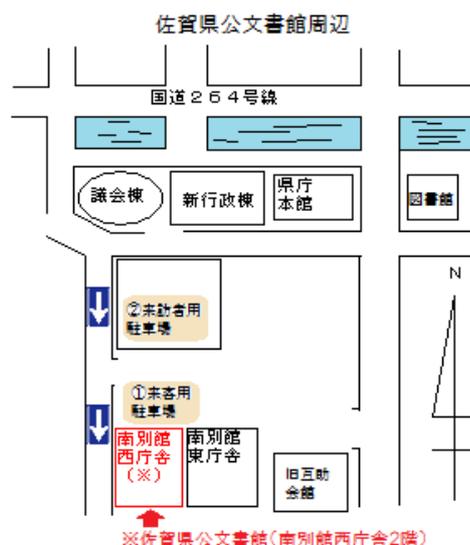
17:00医史跡めぐり終了・解散

※1) 資料代500円必要。徴古館作成の『城下の医史跡めぐり』代金です。お持ちの方はそれを持参ください。これに若干、新史料を加えてお配りします。)

※2) 公文書館では古藤浩さんにお世話になります。

※3) 相良知安史料は、日曜日なので現物でなく、複製史料です。相良隆弘さんに説明いただけることで話をすすめています。

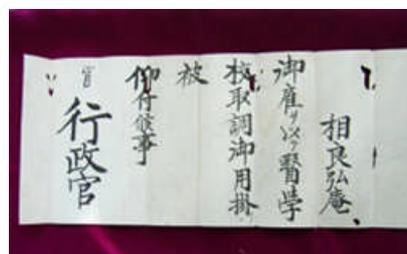
※4) 当日、18時00分から、佐賀大学医学部近くの『廬山』で会費制(5000円くらい)で、懇親会を持ちたいと思います。こちらもご参加ください。



佐賀医学史話

相良知安とその時代

佐賀藩出身相良知安(1836~1906)が、明治期の我が国医学の近代化に取り組んだ。知安は通称弘庵。佐賀藩医学校好生館で研修後、江戸遊学し、佐倉の順天堂、さ



相良知安医学校取調御用掛任命書
(県立図書館蔵)

らには長崎養生所（のち精得館）でオランダ人医師ボードウィン（A.F.Bauduin、1820～85）に学んだ。明治2年（1869）正月、順天堂時代の友人であった福井藩出身岩佐純（1836～1912）とともに、医学校取調御用掛の命が下った。

じつは、ボードウィンは、旧幕府から西洋式海軍病院設立の方針を得て、オランダに帰国し、多くの医療器具を購入して横浜先に送った。ところが、幕府が崩壊し、その医療機器は新政府に接收されたため、ボードウィンは大阪の仮病院で臨床医をしながら、新政府に西洋式病院の設立の約束履行をせまっていた。ボードウィンの門人でもある二人は大阪に行き、新医学校設立を約束し、この問題が解消できた。

この対応の成功により、二人は新政府の医学校設立の管理的立場を任されることになった。二人は、神田お玉ヶ池種痘所、西洋医学所（1861）、医学所（1862）、大病院、そして、医学校兼病院（1869）と変遷した西洋医学校改革をまかされた。

知安は「西洋大学ノ盛ナルモノハ独乙ナリ、英仏ハ害アツテ利ナシ」（回想記）という信念でドイツ医学導入を目指した。なぜ彼はドイツ医学導入を目指したのだろうか。

第一に、彼も含めた蘭方医が学んだオランダ医学書のもとにはドイツ医学書が多かったことである。例えば、『解体新書』がドイツのクルムスの解剖書だったし、好生館で教科書的に使われた医学書に『扶氏経験遺訓』があり、これはベルリン大学教授フーフランドの内科書オランダ語版を緒方洪庵が翻訳したものだ。第二に、シーボルトなど我が国医学に大きな影響を与えた商館医はドイツ人であったこともドイツ医学の優秀性を実感させただろう。第三に、蘭方医たちにとって、オランダ医学の背景にあるドイツ医学への親近性があったことなどの理由があげられる。このような観点から、知安は学術的にはドイツ医学導入を信念としたのであろう。

ところが、当時、医学校兼病院の院長には、イギリス人医師ウイリス（William Willis、1837～94）が就任していた。戊辰戦争の際に、薩摩兵らへの献身的かつ適切な傷病兵治療をした功績があったからである。新政府の要人らも、戊辰戦争での恩義もあり、すでに英学の時代であるとしてイギリス流医学の採用を推薦していた。

相良は、当時、知学事として文教の責任者であった前土佐藩主山内容堂（1827～72）に、ドイツ医学導入を建議した。容堂はイギリスと我が国は特別な関係にあり、イギリス医学の導入を既定路線として知安を斥けたと言われる。

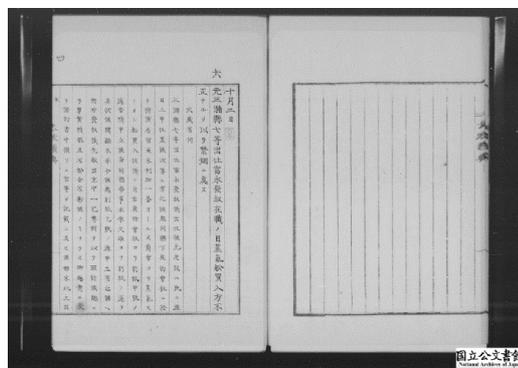
この意見対立

しかし、明治2年7月の官制改革で相良・岩佐は大学小丞につき、8月には知学事にかわる大学別当として岩佐の前藩主松平慶永が就任した。こうした体制のもとで、相良らのドイツ医学導入路線がすすめられた。

ウイリスは、相良らにより権限が制限され、門人石神良策（1821～75）らの鹿児島への勧誘もあり、明治2年10月に辞任した。この後任にはなお、政府内にはイギリス医師模索の動きがあったが、相良の佐賀藩時代の英学の師でもあるオランダ出身アメリカ人宣教師フルベッキ（G. H. F. Verbeck、1830～98）は、アメリカ人医師シモンズ（D. B. Simons、1834～89）を推薦し、シモンズは、翌明治3年1月に大学東校教師に就任している。

明治2年12月に医学校は大学東校に改称され、相良らは、医学上の最高位の大学大博士として順天堂での恩師佐藤尚中を迎え、翌年1月からドイツ人医師二名雇用の政府間交渉を開始した。

一方、ウイリスは、明治2年12月に鹿児島へ門人石神良策とともに向かい、鹿児島医学校の校長として、のちに脚気治療の先駆者



となった高木兼寛（1849～1920）ら優れた医師を養成することとなった。

知安はさらなる医制改革を進めんとした矢先の明治3年9月に、部下の不正事件に連座したとして、突然、弾正台に拘留された。一年二ヶ月の間、取り調べのないまま、罪人扱いを受け、明治4年11月、「元大学権大丞相良知安外一人、英和字書買入方不正二付禁固又贖罪」（国立公文書館蔵、右写真）と判決があり、ようやく釈放された。

その混乱や普仏戦争（1870～71）の影響もありドイツ人医師の来日も遅れ、明治4年8月

相良知安判決（国立公文書館）

に、ようやくドイツ人陸軍医ミュルレル（Benjamin Carl Leopold Müller, 1824～93）と海軍軍医ホフマン（1837～94）が来日し、大学東校において予科三年、本科五年のドイツ式医学教育を開始した。ミュルレルは外科のほか、婦人科、眼科をドイツ語で講義し、気管切開術などの新外科手術を行った。ホフマンは、内科学、病理学、薬物学などを教授した。両者は医師と薬剤師の独立を説き、製薬学科も設立させるなど、我が国近代医学教育の基礎を築いた。

冤罪のとけた知安も、明治5年に文部省に復職し、第一大学区医学校（前大学東校）校長に就任し、明治6年には文部省医務局長も兼務し、医制改革に乗り出し、西洋医学採用を基本とする腹案を作成しはじめた直後にまた罷免された。

知安は、明治3年段階には、護健使という医官制度をたて、国費による西洋医学校の全国への設置など医療国営制を骨子とする構想を考えていた。佐賀藩は、医業免札制度で医師の技術向上をはかり、医師養成のために安政5年（1858）に藩医学校好生館をたて、また種痘普及にも他藩領と異なり、藩費による種痘を普及させていたので、領民への医療は藩（国家）が担当するという考えは、ごく当然に知安に浸透しており、人民の医療は国家が担当すべきことが当たり前であった。そうした構想は、新医制案にもにじみでいた。しかし、財政難の新政府にとってそれは許容できるものではなかった。罷免の背景にそういう事情も考えられる。

彼の医学制度構想をまとめたのが『医制略則』で、県立図書館にある。我が国の近代医学制度の成立にかかわる大変貴重なものである。

彼の医制改革案は、後任の長与専斎医務局長に引き継がれ、明治七年に医制として公布された。ただし知安の医療国営制は採用されず、私的開業制を認め、公的医療への投資を軽減した医制改革ではあるものの、西洋医学採用は基本方針となった。

医制は全七六条からなり、一般衛生、医学教育、医師養成、薬舗開業試験などについて規定し、医師制度の全面改革をせまる内容であった。

医薬兼業による旧医（漢方医）は「今日百端ノ弊害ヲ醸」したとされ、医薬分業制が打ち出された。この意図は、旧来の薬札を薬価と診察料を分離し、医師の診察料を正当な技術報酬とする近代的経済思想が根底にあった。医師免許試験は、物理学・化学のほか、解剖学・生理学・病理学・薬剤学・内科・外科の六科と産科・眼科・口中科などの専門一科によるもので、漢方医は受験資格がなくなった。従来からの漢方医は一代限りの存続を認められたが、やはり漢方医の猛反発を呼び、明治28年までの政治闘争を生むことになった。

知安は罷免後、一時、文部省に出仕を命ぜられたが、明治18年（1885）に一切の公職を退き、晩年は占いなどをするなど、貧窮の中に明治39年（1906）インフルエンザ



医制略則（県立図書館蔵）

により、71歳の生涯をひっそりと終えた。

以上は、最新刊の青木歳幸『江戸時代の医学—名医たちの300年』（吉川弘文館、6月10日刊）と、

相良隆弘さんの相良知安ホームページ<http://sagarachian.jp/main/89.html>をもとに構成しました。

今後の予定

9月9日（日）平戸オランダ商館跡調査

ご家族、知人も参加できますので、いまから予定を空けておいてください。

12月16日（日）佐賀医学史研究会総会

島本良順の御子孫島本良治氏や、横尾元丈の御子孫横尾氏らにも参加していただいて、“佐賀蘭学のタベ”でもできるとよいかと構想しています。

編集後記

本号は6月10日の市内医史跡めぐりの再度の案内と、明治初年の相良知安の活動を、『江戸時代の医学』（吉川弘文館、5月28日刊行）に書いたものを中心にのせました。国立公文書館にも相良知安の関係資料が若干あります。県立図書館の相良知安関係史料と合わせると、さらに知安の活動や構想が見えてくると思います。

この9月には、佐賀城本丸歴史館で、伊東玄朴と相良知安（仮）の関係展示が行われます。ぜひ、こちらもおでかけください。